



TITLE:

京大広報 No. 251

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 251. 京大広報 1983, 251: 347-360

ISSUE DATE:

1983-04-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209435>

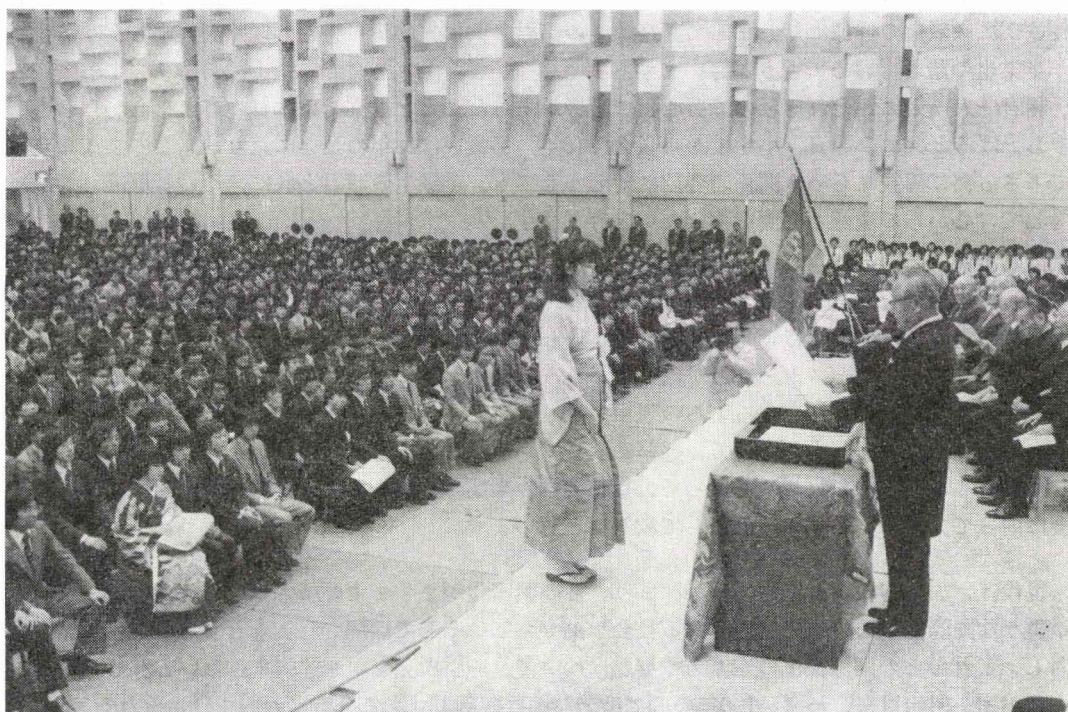
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

# 京大広報

No. 251

京都大学広報委員会



昭和57年度卒業式（3月24日・総合体育館）

## 目 次

### 卒業式における総長のことば

総長 沢田 敏男… 348

昭和58年度入学者選抜学力試験の結果… 350

昭和57年度修士学位授与式… 351

昭和57年度卒業式… 351

部局長の交替… 351

昭和58年度医療技術短期大学部入学試験の結果… 352

昭和57年度医療技術短期大学部の卒業式・修了式… 352

外国人学生等の博士の学位取得に関する答申… 352

原子炉実験所第17回学術講演会… 355

### <随想>

大学教育と「国語」 名誉教授 池上 禎造… 356

### <紹介>

人文科学研究所・東洋学文献センター

—漢字、漢籍の電算機処理をめぐる— 357

### <保健コーナー>

スチューデント・アパシー… 359

計報… 360

## 卒業式における総長のことば

総 長 沢 田 敏 男

本日ここに、昭和57年度卒業式を挙行し、文学士201名、教育学士55名、法学士339名、経済学士189名、理学士255名、医学士123名、薬学士78名、工学士837名及び農学士266名、合計2,343名の諸君に、合格証書を授与できますことは、本学の大きな喜びとするところであります。

諸君の卒業を祝い、その前途を祝福するためにご臨席頂きました本学名誉教授の先生方、各部長並びに教職員の皆様に対しまして、卒業生の諸君と共に、心から感謝し厚く御礼申し上げます。

卒業生の諸君、おめでとうございます。

諸君一人一人に、それぞれのご苦心、ご苦労があったことと推察し、本日の卒業を心からお喜び申し上げますと共に、今日、小学校から数えて16年、あるいは18年の長きに亘り、諸君の学業を支えて下さったご両親はじめ、関係者各位に対しましても、卒業生の諸君と共に、そのご厚志、ご恩に対して、心からの敬意と感謝を捧げたいと存じます。

諸君が希望に燃えて京都大学に入学されてから4年、あるいは6年間、蛍雪の功になって今日ここに新しく学士号を得られたのでありますが、この間、いろいろの方法で勉学がなされたと思います。自ら学ぶことの楽しさを覚え、そして、いわゆる京都学派の学風を肌で感じ得た諸君もあるでしょう。また、勉学とスポーツとが両立するよう工夫し、心身の錬成に日夜努力を重ねた諸君もあるでしょう。さらにまた、いろいろの理由により留年し、今日を迎えた人もあると思います。諸君は、それぞれ在学期間中を顧みて、感慨に浸っていることではあるまいかと思いますが、諸君はいずれもめでたく新しく学士になられたのであって、京都大学の卒業生であるという自信と誇りをもって、実社会に向って力強い第一歩を踏み出して欲しいと思います。

現代は、国際的な相互依存関係が深まり、その緊密化がますます要請される時代であります。このような国際化や国際交流が進展する社会へ巣立ちし、そして活躍されようとする卒業生の諸君に対し、これからの国際交流の在り方や姿勢について、一言所感を申し述べてみたいと存じます。

我が国が明治以来、わずか100年の間に欧米諸国に匹敵し、ある分野においては、それを凌駕するほどの高度な科学技術の水準に到達し、今日米国に次ぐ巨大な生産力を持つ経済大国へと成長してまいりました。このような日本の急速な発展は、近代の日本人が、自らを常に、進んだ外国との対比の視座においてとらえ、その較差の克服を目指して、たゆまぬ努力を積み重ねることによって初めて可能となり、成就し得たものと申せましょう。日本人にとって、外国とは、すぐれて欧米の先進諸国であり、そこから何物かを学び、それに向って自らを近づけようとして、ひたすら研鑽を続けてきたいわば師であり先達でありました。外国に対する日本人のこうした態度は、日本が短い年月のうちに近代化を達成し、先進諸国に伍した国力を備えようとしておこなった一つの選択であり、通過しなければならぬ歴史の道程であったといえましょう。

しかしこの選択は、日本人の精神構造に二つの後遺症的なものを残したように思われます。その一つは、日本人の外国に対する姿勢があまりに受動的であったため、外国に対して語りかけることをすっかり忘れてしまったことであり、もう一つは、日本人の外国に対する関心が、欧米に偏重してしまったという事実であります。

明治以来、数多くの日本人が外国へ留学しました。また、多種多量の洋書が輸入され、先進的知



識が貪欲に吸収されてまいりました。日本人の外国に対する関心の強さには驚嘆すべきものがあると思います。しかし、一部の例外を除くと、こうした日本人の外国とのかかわりは、もっぱら受容の一方に限定されてきたようです。そして受動的姿勢のこの傾向は、今日国際交流の進展と共に、ようやく薄らぎつつありますが、しかしなお、基本的には余り変わっていないように思います。こうした日本人の姿は、外国人にとってどのように映じるでありましょうか。それは自らの姿をあらわすことなく、一切を呑み尽してしまう“ブラック・ホール”のような、不気味な存在と映っているかもしれないのです。このような状況は、国際社会における日本の位置づけとして決して好ましいものではありません。日本人は世界に向って自らの人間像を示すことに、もっともっと努力する必要があると思います。

日本人が自信に満ちて、自らの持つ文化を、外国人に伝達しようと積極的に努力した時代があります。明治40年(1907年)初めて、大乘仏教に関する一書を英文で著わした鈴木大拙は、昭和35年(1960)、91歳でこの世の生涯を終えるまでの間に、実に30冊にものぼる英文著書を世に問いました。昭和13年(1938)に刊行された『禅と日本文化』は、今日もなお日本文化を理解する手引書として、外国人の間で読みつかれているようです。

この他にも岡倉天心、新渡戸稲造、内村鑑三など、自らの思想を外国人に向って、外国語で表明した何人かの優れた先覚者がいます。しかし残念ながらその数は、外国から学ぶことに終始した日本の知識人の数に比べて、余りにも少ないといわざるを得ないと思います。

国際化時代と呼ばれる現在、我々日本人はもはや寡黙であってはなりません。自らの姿を外国に示し、誤解が生ずれば、これを言動によって積極的に解きほぐしていく必要があります。そのために相手国の言語を習得する必要があることはいうまでもありません。しかしそれは、あくまでも手段であり、コミュニケーションの入口であるにすぎません。より重要なことは、その手段によって如何なる自己を表現するかということであり、私は諸君が、これまで学ばれた学問をベースとして、更に研鑽を積み、その研鑽によって培われ醸成された豊かな人間性をもって、世界の人々の信頼と尊敬を勝ち得るよう、一層の努力を続けられるよう希望いたします。

つぎに、今日世界の人口のおおよそ3分の2は、いわゆる発展途上国の人々によってしめられています。それにもかかわらず、もっぱら外国から学ぶ姿勢をとり続けてきた日本人にとって、これらの発展途上国に関する知識と関心は、欧米に関するそれと比べて著しく低調で、かつかたよっているという現実、否定することができません。このような現実、一日も早く是正されなければなりません。その場合、忘れてならぬ基本的問題の一つ指摘しておきたいと思います。それは、発展途上国の各国それぞれに、我々と同じ人間が住み、歴史と文化を共有しているという平凡な事実、しかし貧困とその除去、低開発と開発というもっぱら経済的関心からの接近方法では、とかく軽視されがちな事実であります。たしかに、経済の発展は貧困を除去し、人々に幸福をもたらす重要な条件ではありましょう。しかし経済的発展の陰に、その担い手である人間の姿が見失われるならば、せっかくの物質的繁栄も真の意味での善や幸福をもたらすことにはならないと思います。いわゆる南北問題の重要性はあらためて強調するまでもありません。ここで強調したいのは、人間を通しての南北の触れ合いであり、人間性に立脚した相互理解の深め合いであります。そして国際的相互依存関係を深めるための源泉も、まさにこのことにあると思います。

私は諸君が、これから実社会の中で出会う世界の国々について、そしてとりわけ、これまで見逃されがちであった南の国々について、その歴史の流れ、文化の歩みとまた、それぞれの社会の成り立ちについて、謙虚にこれを学び、その理解の上に、人間性豊かな交流を深めてくれることを、心から期待するものであります。

今や世界人類の歴史は、重大な時期にさしかかっていると申せましょう。これまで人類が形成し、親しんできた文明的価値が行き詰まり、社会運営においてもその活力を喪失しつつあります。また、政治も経済も理想の形を見失い、そのことによって国家間に不要の摩擦の発生も見られます。我が国においても、先に臨時行政調査会の行った答申に示されているように、厳しい行財政運営の時代を迎えています。そして欧米の先進工業諸国との経済摩擦などのように、国際的調和の面においても問題は少なくなく、我が国の国際性は今なお厳しく問われております。このように、明日からの諸君を取り巻く、内外の社会環境は、厳しいものといわざるを得ません。諸君が今後、人生航路において直面される困難な“壁”は、人類の歴史や国際社会の状況と深くかかわって発生しているだけに、深刻であり、その打開、克服は不可能であると思われるかもしれません。しかし諸君、知性の徒に絶望や敗北主義は禁物であります。春秋に富み、今なお未完成の魅力に満ちた諸君は、いわば未来から現代に留学されたに等しい存在であります。諸君の存在意義は、平和で豊かでかついきいきとした未来社会の創造にあるということをわきまえて欲しいと思います。

かつて19世紀の末には、「世紀末」思想という考え方が見られ、人々は閉塞の状況に身を置き、人類の将来について暗いペシミズムが語られました。我々が間もなく迎える今世紀の「世紀末」を、再びそのような暗い状況にしてはならないでしょう。そのために我々は、現代世界の直面している様々な問題 — 経済摩擦、南北問題、さらには科学技術文明のもたらす人間疎外の問題や、精神文化の衰退の問題等 — に大きく目を向けなければなりません。そしてこの問題解決への対処の仕方としては、広く地球的視野から、また国際的観点から取り組み、国際協力や協調によってその解決をはかることが必要になるでしょう。

そこで諸君が、さきに私が指摘したような、国際交流に対する日本人のあるべき姿勢について、十分留意されると共に、常に国際感覚やその感受性を磨くことに努め、国際協力等の交流の場において、信頼と尊敬を得てリーダーシップを発揮することができるよう希望するものであります。

新しく学士となられた卒業生の諸君、明日からの国際社会におけるご活躍をお祈りして止みません。どうか諸君、健康にくれぐれも留意されると共に、母校京都大学をいつまでも心の中に抱いて歩んで下さい。京都大学もまた、諸君一人一人の歩みを、永くいつまでも見守り続けることでありましょう。

諸君の栄えある門出に当り、心より祝意を表すると共に、一言所感を申し述べて饞けの言葉といたします。

(本稿は、3月24日の卒業式における総長のことを速記をもとにしてまとめたものである)

## ＜大学の動き＞

### 昭和58年度入学者選抜学力 試験の結果

昭和58年度入学者選抜学力試験の合格者氏名が、3月18日(金)に学部ごとに発表された。

学部別の受験者数および合格者数等は次表のとおりである。





学 部	募集人員	志願者数	第1段階選 抜合格者数	受験者数	倍 率	欠席率 (%)	合格者数	合格者得点		備 考 (満点)
								最 高	最 低	
文 学 部	200	766	—	749	3.7	2.2	200( 46)	918.17	746.17	1,100
教育学部	50	91	—	91	1.8	0	51( 7)	830	714.5	1,050
法 学 部	350	853	852	839	2.4	1.5	350( 41)	974	859.5	1,150
経済学部	200	801	—	784	3.9	2.1	203( 11)	921.34	801.17	1,200
理 学 部	281	993	988	967	3.4	2.1	281( 20)	883	693	1,050
医 学 部	120	322	—	306	2.6	5.0	120( 6)	1,118.5	965	1,250
薬 学 部	80	158	—	154	1.9	2.5	80( 32)	1,020.5	835	1,250
工 学 部	945	1,839	—	1,817	1.9	1.2	945( 16)	1,048.5	773	1,250
農 学 部	300	801	—	788	2.6	1.6	300( 46)	1,038	794.5	1,250
計	2,526	6,624		6,495	2.6	1.9	2,530(225)			

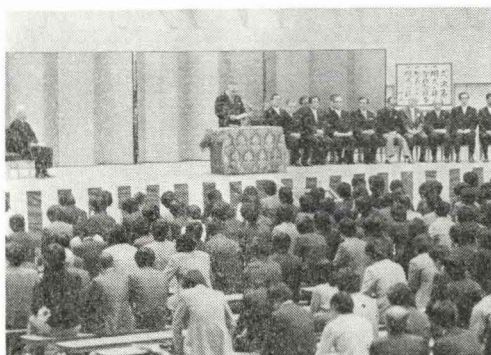
- (注) 1. 受験者数・欠席率は最終日(文・教育・法・経済学部は外国語, 理・医・薬・工・農学部は理科)のものである。  
 2. 合格者数の( )内は女子で内数である。  
 3. 法学部の合格者数の内16名は, 外国学校出身者のための選考試験合格者である。  
 4. 第1段階選抜合格者数の一は, 第1段階選抜を行わない学部を示す。

### 昭和57年度修士学位授与式

3月23日(水)午前10時から, 昭和57年度修士学位授与式が, 本学総合体育館で挙行された。

学位授与式は, 名誉教授など来賓の臨席のもとに学位記授与が行なわれ, 「総長のことば」があって午前10時35分に終了した。

修士課程修了者は, 文学研究科69名, 教育学研究科16名, 法学研究科18名, 経済学研究科13名, 理学研究科128名, 薬学研究科31名, 工学研究科522名, 農学研究科91名の計888名である。



修士学位授与式

### 昭和57年度卒業式

3月24日(木)午前10時から, 昭和57年度卒業式が, 本学総合体育館において挙行された。

卒業式は, 名誉教授など来賓の臨席のもとに行なわれ, 学歌斉唱, 合格証書授与, 「総長のことば」のあと, 「蛍の光」を斉唱して, 午前10時45分に終了した。

新学士は, 文学部201名, 教育学部55名, 法学部339名, 経済学部189名, 理学部255名, 医学部123名, 薬学部78名, 工学部837名, 農学部266名の計2,343名である。

### 部局長の交替

#### 教育学部長

河合隼雄教育学部長の任期満了に伴い, その後任として小林哲也教育学部教授(比較教育学講座担当)が4月1日任命された。任期は昭和59年3月31日までである。

#### 法学部長

太壽堂 鼎法学部長の辞任に伴い, その後任として奥田昌道法学部教授(民法第一講座担当)が4月1日任命された。任期は昭和60年3月31日ま

である。

#### 理学部長

山口昌哉理学部長の任期満了に伴い、その後任として巽 友正 理学部教授（流体物理学講座担当）が4月1日任命された。任期は昭和60年3月31日までである。

#### 工学部長

佐藤 俊工学部長の任期満了に伴い、その後任として近藤良夫工学部教授（冶金反応及び操作講座担当）が4月1日任命された。任期は昭和60年3月31日までである。

#### 教養部長

渡邊 實教養部長の任期満了に伴い、その後任として西村 孟教養部教授（数学担当）が4月1日任命された。任期は昭和59年3月31日までである。

### 昭和58年度医療技術短期大学部 入学試験の結果

昭和58年度医療技術短期大学部入学試験の合格者氏名が、3月16日（木）に発表された。

受験者数及び合格者数等は次表のとおりである。

学科・専攻科	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数
看護学科	80	132	111	96
衛生技術学科	40	179	160	42
理学療法学科	20	166	134	20
作業療法学科	20	89	74	20
専攻科助産学 特別専攻	20	49	35	21

### 昭和57年度医療技術短期大学部の 卒業式・修了式

医療技術短期大学部では、3月19日（土）午前10時から、本短期大学部大講義室において来賓・父兄等臨席のもとに、卒業式及び修了式を挙行了。式は卒業証書及び修了証書授与、「学長のことば」、来賓祝辞と進行し、午前10時30分終了した。

この新しい門出を迎えた者は、看護学科77名、衛生技術学科42名及び専攻科助産学特別専攻20名である。

（医療技術短期大学部）

### 外国人学生等の博士の学位取得に 関する答申

今回、大学院審議会制規等専門委員会より、外国人学生等の博士の学位取得について答申を受け、3月8日に開催された大学院審議会において審議の結果、これが承認されました。この問題の重要性に鑑み、ここに答申を掲載して、広く学内にお知らせします。

この答申では、まず本学における留学生の学位取得状況が報告されていますが、この種の調査は今回はじめて行なわれたものであり、今後の調査で補強することによって貴重な資料となるものと考えます。さらに答申では、外国人学生等の学位取得の問題を検討するに当たっての基本的観点が明確にされた上で、学位授与の現状を改善するために、当面、実行可能と考えられるいくつかの方

策が提案されています。

本学における国際交流が進展しつつある現在、外国人学生等の学位取得の問題については、各研究科において種々検討されているところでありますが、本答申はその状況を整理して、広く学内に伝えるとともに、新しい方策をも提案し、もって各研究科における本問題の検討に資することを目的としています。

この重要な問題についての答申をまとめられた制規等専門委員会委員各位のご努力に対して、深甚な感謝の意を表します。

今後各研究科において、外国人学生等の博士の学位取得条件が一層改善されることを希望するとともに、本学として、これに必要な諸種の条件を改善するため、一層の努力をいたす所存であります。

昭和58年3月10日

京都大学総長 沢田 敏男



昭和58年1月14日

大学院審議会議長

沢 田 敏 男 殿

大学院審議会制規等専門委員会

委員長 吉 沢 尚 明

**外国人学生等の博士の学位取得  
について（答申）**

本委員会が諮問を受けました外国人学生等の博士の学位取得の問題について、現状を調査するとともに種々の観点から検討しました結果、当面の方策をここに答申いたします。

**§1. 経緯及び答申内容の要旨**

外国人学生等の博士の学位取得については、昭和53年10月の大学院審議会において問題提起が行われ、また昭和55年4月大学院審議会議長から本委員会にこの問題について改善方法の検討が諮問された。

本委員会は、本学における国際交流についての見解・方針をこの問題の検討の基礎に置くことが必要であると考え、これに対して、総長の諮問に基づいて国際交流委員会においてまとめられた答申[1]（本答申末尾の一覧表を参照）が、本委員会に回付された。また昭和57年9月、外国人学生の問題等に関して、文部省の大学院問題調査研究会における検討結果[2]が発表された。これらは、本委員会の審議において基礎的な資料として取り扱われた。

本答申の要旨は以下のとおりである。

§2において、本委員会の基本的な観点について述べる。特に、学位の水準及び取扱いに関しては、答申[3]が基礎となつている。§3において、外国人学生等の学位取得のために当面適当と考えられる具体的方策を若干提案する。検討の過程で、一層根本的な方策についても論議されたが、そのうちの一つの問題を、参考として§4に追記する。

なお、§3に述べる提案はすべてが直ちに大学内で実施できるものとは限らないが、現行制度の下で実施可能と考えられるものであり、現にこのうちのいくつかは若干の研究科において実行されている。

本答申は、各研究科においてそれぞれ検討され、あるいは実施されている方策を本委員会の観点から紹介し、また新しい提案を行つて、各研究科の検討に資することを目的とするものである。本答申の提案は、最終的な方策ではなく、今後情勢の進展に応じて更に新しい方策の検討を続けるのが適当である。

**§2. 基本的観点**

(A) 本答申において「外国人学生等」と称する者は、留学生のほか、研修員、研究生等として留学している者をいう。ここで対象とされる者は、必ずしも国籍によつて判断するのではなく、日本語を日常言語としているか否か、あるいは専攻分野についての学力が十分か否か等を勘考して総合的に判断されるべきものである。その理由は、ここで扱う学位の問題は申請者個人の経歴に関連するものであつて、形式的に国籍をもつて一律にいうことができない問題であるからである。

(B) 本委員会の調査によれば、本学では従来から、留学生の課程博士取得率は、その他の者と比較して相当高いようである（添付資料参照）。この資料に表われた数値は、統計的に有意であるためには、特に人文・社会系研究科の人数が十分でないであろう。しかし、本委員会における報告によれば、一般的に§3の方策のいくつかは従来から相当実行されており、指導教官には留学生の課程博士取得率は比較的高いと感じられている。資料の数値は、これを裏付けるものと見ることができよう。本答申は、この現状を認めた上で改善策を提案するものである。

(C) 各研究科の主たる目的は研究者の養成であるとされている（中間答申[4]参照）。したがつて、外国人学生等の学位に対して何らかの特別な配慮がなされるとしても、それはこの主目的を変質させない範囲内のものであると考えるべきである。学位の水準の見直し等は、ここでは前提としない。

(D) それぞれの学位の取扱いは、本質的には申請者に依つて変わるものではない。すなわち各研究科では、学位申請や審査等に関する手続、方法が、すべての申請者に共通に適用される一般的な形で定められている。したがつて、以下ではその



手続、方法等の枠内で、個々の申請者に応じて変更し得るものを検討した。

### §3. 具体的方策

#### I. 学位論文と審査について

- (1) 学位論文の用語についての制限（特に、日本語に限る等の条件）が課されている場合には、これの緩和を考慮すること——

ここで対象とする外国人は、日本語を日常言語としないのであるから（§2. (A)），学位論文を日本語で書くことは一般には相当の負担である。したがって、日本語を用いて学位論文を書くことが本質的な条件とされていない場合には、この制限を緩和することが望ましい。これは一般に学問の国際性と国際化という観点からも考慮され得ることであろう（答申[3]参照）。

- (2) 論文博士の場合に、外国語の学力を確認する試問の負担を軽減すること——

この問題は、学位申請者にとって、本学への留学のために日本語を学習するほかに、なお2種類の外国語の試問を受けることは、大きな負担であることから提起された。答申[3]によつて、「外国語」とは学位申請者の日常言語でなく、かつ当該分野において国際性をもつ言語と定義されているから、日本語がそれに該当する場合は、この日本語は当該申請者にとつての「外国語」の一つであり、これについて試問することによつて、上述の負担は軽減される。なお今後、1種類の外国語のみを課すると定める研究科においては、ここにいる外国語の負担はほとんど問題にならないと思われる。

- (3) 課程を終えたことを証する英文の証書を発行すること——

これは学位ではないが、課程を終えたこと、すなわち所定の年限博士（後期）課程に在学して、所定の研究指導を受けその成果につき認定され退学したことを、英文の証書の形で証明することは、意味を持つことがあると思われる。

#### II. 学位取得のための指導について

- (1) 学位論文作成についての指導を特に配慮すること——

必要な場合は、外国人学生のハンディキャップを補うために、チューターを充実することのほ

か、例えば複数の指導教官を配すること等を考慮するならば、相当の効果を挙げる場合がある。しかし、教官の過度の負担を招くようになることは望ましくない。

- (2) 専攻又は研究科を変えることが留學目的に有効な場合は、特にその指導をすること——

転専攻は研究科内の問題であり、転研究科も制度上可能であるが、留学生の場合、それが留學目的に反せず、かつそれによつて学位取得の見込みが大きくなるならば、積極的にそのように指導することは適当である。

- (3) 滞日期間を一定限度延長できる手段を講ずること——

標準修業年限で学位を取得することは、日本人学生にとつても一般的ではなく、在学期間を延長したり、クレジット期間を活用する場合が多いが、外国人学生にとつてこれらのことは一層必要である。このためには滞日期間の延長が必要であるが、帰国して研究を続けるよりこの方が論文作成に有効であることは明らかである。このために一定期間、例えば6か月の延長を、指導教授の証明の下で申請できるような制度又は運営が望ましい。

- (4) 事情によつては、目標を論文博士の取得に変更するよう指導すること——

留学生が事情によつて途中で帰国する等の場合に、論文博士への切替えを考慮することが有効な場合がある。

- (5) 学位論文作成のために、帰国後も本学教官による指導を受け、あるいは再来日が容易にできるようにすること——

再来日の制度としては、日本学術振興会の論文博士号取得希望者援助事業等があるので、有効な場合はそれらを活用することが望ましい。

#### III. 入学時の能力判定について

- (1) 志願者の能力判定と入学指導を各研究科において行うこと——

研究科、専攻のそれぞれの基準によつて志願者の能力を判定することは、志願者と研究科の双方にとつて有益である。適当な研究科、専攻を選ぶことについても研究科が指導できることが必要である。また、能力に応じて、必要ならば他大学への振替えができることが望ましい。

- (2) 6か月から1年程度研修させた上で、入学の適否を判断できるような方法を可能とすること——

6か月から1年程度の期間、学習させ指導することは、大学院以前の教育の差を埋め、また能力判定に資するので、適正な進路を選ばせるために有効である。本年度から行われている中国赴日研究生（大学院留学生）予備教育の制度は、この点で有効と考えられる。これと類似の方式が必要な場合に実施できることが望ましい。

#### Ⅳ. 入学案内について

- (1) 本学の各研究科の教育と学位の実情を外国に知らせるため、英文の“入学案内”を作成すること——

本学の各研究科の学位の水準、取得率などを周知させることは、本学への志願又は派遣をきめる際に、正確な認識を与えるために必要である。なお、この案内において、学位の名称の英訳には十分注意を払うことが必要である。

- (2) 論文博士の制度は、当面本学への留学生又は留学経験のある者に対してのみ適用すること——

論文博士は我が国特有の制度といつてよいもの

である。これを国際的に開放して、外国からの一般の申請を受け付けることとするためには、十分の準備がなければ混乱を招くおそれがある。

#### §4. 追 記

留学生のために新しい種類の学位を設けることには問題が多いが、若干の大学の研究科では学術博士の制度を利用できるようにされている。これにも種々の問題があるが、将来、§3の諸方策等で、なお不十分である場合には、検討すべき課題であると思われる。

#### 添 付 資 料

○京都大学の留学生についての調 (略)

#### 引用答申等一覧表

- [1] 外国人学生等の博士学位取得について（昭56. 1. 21国際交流委員会答申）  
 [2] 外国人留学生に対する学位授与の改善について（昭57. 9 文部省大学院問題調査研究会議）  
 [3] 博士の学位の性格及び水準並びに審査手続等について（昭57. 5. 28答申）  
 [4] 大学院・研究科の目的・性格及び整備・充実のための基本的方針（昭56. 1. 16中間答申）  
 §1. 1

#### <部局の動き>

#### 原子炉実験所第17回学術講演会

原子炉実験所では、恒例の学術講演会を、3月18日（金）午前9時30分から午後5時まで、原子炉実験所附属原子炉応用センター大講習室において開催した。全国の共同利用研究者をはじめ学界各分野から多数が来聴され、盛会であった。演題、講師は次のとおりであった。

##### Ⅰ. 特別講演

「微量元素から見た地球化学と考古学」

岩石中の貴金属元素 木村 幹  
 マグマ分化過程における微量元素の挙動について 岡本健二、増田康之、八木伸二郎  
 分析化学的手法による古代土器の産地推定 三辻利一

蛍光X線分析法を用いた石器原材の産地推定

—西日本におけるサヌカイト

および黒曜石遺物について—

薬科哲男，東村武信

##### Ⅱ. 一般講演

スーパーミラー・タービン式超冷中性子源設備

宇津呂雄彦，川端裕司，奥村 清

半導体材料中の不純物原子の濃度分布

大泊 厳，木村逸郎，米田憲司

インパー合金の磁性と変態

山田 宰，小野文久，中井生史

円山 裕，荒江房利，太田公春

飛行時間背面反射中性子回折法による

CsCuCl<sub>3</sub> の構造的な一次相転移

阿知波紀郎，E. Steichele，F. Söffge

メスバウアー分光法による合成金属の電子状態

酒井 宏，松山奉史，山岡仁史









の範囲を超えて唱えられることは、注目に値する。

さて、電算機の進歩は、同文という共通の基盤を失いつつある漢字を、いま一度同じ土俵（ソフトウェア）の中で扱うことを可能とした。“kan-ji”という言葉は、北京、台北、京都はもちろん、ワシントンやロンドン等世界の都市に住んで、漢籍（中国語文献）目録を電算機によって処理するための研究を進めてきた者が、昨年の8月に、はじめてキャンペラで会したとき、大変新鮮な響き

を持つ言葉として受け入れられた。その言葉には、日本語電算機処理のすぐれた業績を評価し、漢字あるいは漢籍の電算機処理に対する日本の研究者の参加を促す、熱い期待が込められている。

本センターでは、大型計算機センターと共同で、漢籍の電算機処理開発を進め、すでに『康熙字典』より約50,000字種の漢字を入力して、漢字入出力システム（図1 参照）の完成を旨す一方で、人文科学研究所で昭和9年から刊行してきた『東洋学文献類目』や唐の詩人李商隠（義山）の

『樊南文集』正編8

巻 補編12巻（図2 参照）等を、電算機によって編集し刊行しようとしている。

ところで、漢字の歴史は遠く殷（商）代の甲骨文に溯るが、漢字という言葉の定着は、さほど古くない。モンゴル族等が漢民族を支配するようになったとき、異なる文字を意識して、このように呼び慣らされた。だから、中国を研究する者でも、とりわけ近世以降を対象とするときは、他の周辺諸民族の言語を知らねばならない。そこで私達は、漢字だけでなく中国とかかわりの深い、こうした東洋のさまざまな文字についても、汎用化のための研究に着手した。

漢字を電算機によって処理するとき、一般には、計算機可読形式のコードを用

### 感一漢

公不感	無感	深事	感君	補	03-14	有英	感入	則後	通感	補	10-08
不感	知任	激知	憤感	補	04-02	英感	通人	感莫	感莫	補	10-08
感不	伏惟	事憤	感感	補	04-05	感感	感莫	感莫	感莫	補	11-13
感不	伏惟	感憤	感感	補	04-13	感感	感莫	感莫	感莫	補	11-13
感不	伏惟	感憤	感感	補	04-13	感感	感莫	感莫	感莫	補	11-14
感不	伏惟	感憤	感感	補	04-19	感感	感莫	感莫	感莫	補	11-18
感不	伏惟	感憤	感感	補	05-02	感感	感莫	感莫	感莫	補	11-20
感不	伏惟	感憤	感感	補	05-03	感感	感莫	感莫	感莫	補	11-22
感不	伏惟	感憤	感感	補	05-07	感感	感莫	感莫	感莫	補	11-23
感不	伏惟	感憤	感感	補	05-08	感感	感莫	感莫	感莫	補	12-09
感不	伏惟	感憤	感感	補	05-08	感感	感莫	感莫	感莫	補	12-09
感不	伏惟	感憤	感感	補	05-09	感感	感莫	感莫	感莫	補	12-10
感不	伏惟	感憤	感感	補	05-13	感感	感莫	感莫	感莫	補	02-19
感不	伏惟	感憤	感感	補	05-14	感感	感莫	感莫	感莫	補	02-19
感不	伏惟	感憤	感感	補	05-21	感感	感莫	感莫	感莫	補	02-19
感不	伏惟	感憤	感感	補	05-21	感感	感莫	感莫	感莫	補	03-27
感不	伏惟	感憤	感感	補	06-04	感感	感莫	感莫	感莫	補	09-03
感不	伏惟	感憤	感感	補	06-06	感感	感莫	感莫	感莫	補	01-17
感不	伏惟	感憤	感感	補	06-06	感感	感莫	感莫	感莫	補	01-25
感不	伏惟	感憤	感感	補	06-06	感感	感莫	感莫	感莫	補	01-27
感不	伏惟	感憤	感感	補	06-06	感感	感莫	感莫	感莫	補	01-28
感不	伏惟	感憤	感感	補	06-07	感感	感莫	感莫	感莫	補	01-28
感不	伏惟	感憤	感感	補	06-13	感感	感莫	感莫	感莫	補	01-29
感不	伏惟	感憤	感感	補	06-14	感感	感莫	感莫	感莫	補	01-32
感不	伏惟	感憤	感感	補	06-18	感感	感莫	感莫	感莫	補	01-42
感不	伏惟	感憤	感感	補	07-01	感感	感莫	感莫	感莫	補	01-43
感不	伏惟	感憤	感感	補	07-03	感感	感莫	感莫	感莫	補	01-55
感不	伏惟	感憤	感感	補	07-12	感感	感莫	感莫	感莫	補	02-06
感不	伏惟	感憤	感感	補	07-14	感感	感莫	感莫	感莫	補	02-08
感不	伏惟	感憤	感感	補	07-15	感感	感莫	感莫	感莫	補	02-10
感不	伏惟	感憤	感感	補	07-16	感感	感莫	感莫	感莫	補	02-11
感不	伏惟	感憤	感感	補	07-17	感感	感莫	感莫	感莫	補	02-20
感不	伏惟	感憤	感感	補	07-18	感感	感莫	感莫	感莫	補	02-20
感不	伏惟	感憤	感感	補	07-18	感感	感莫	感莫	感莫	補	02-23
感不	伏惟	感憤	感感	補	07-19	感感	感莫	感莫	感莫	補	02-25
感不	伏惟	感憤	感感	補	07-22	感感	感莫	感莫	感莫	補	03-06
感不	伏惟	感憤	感感	補	07-23	感感	感莫	感莫	感莫	補	03-09
感不	伏惟	感憤	感感	補	07-24	感感	感莫	感莫	感莫	補	03-25
感不	伏惟	感憤	感感	補	08-04	感感	感莫	感莫	感莫	補	03-28
感不	伏惟	感憤	感感	補	08-04	感感	感莫	感莫	感莫	補	03-34
感不	伏惟	感憤	感感	補	08-06	感感	感莫	感莫	感莫	補	03-39
感不	伏惟	感憤	感感	補	08-07	感感	感莫	感莫	感莫	補	04-14
感不	伏惟	感憤	感感	補	08-11	感感	感莫	感莫	感莫	補	04-22
感不	伏惟	感憤	感感	補	08-11	感感	感莫	感莫	感莫	補	04-24
感不	伏惟	感憤	感感	補	08-11	感感	感莫	感莫	感莫	補	04-38
感不	伏惟	感憤	感感	補	08-11	感感	感莫	感莫	感莫	補	05-06
感不	伏惟	感憤	感感	補	08-11	感感	感莫	感莫	感莫	補	05-12
感不	伏惟	感憤	感感	補	08-11	感感	感莫	感莫	感莫	補	05-12
感不	伏惟	感憤	感感	補	08-11	感感	感莫	感莫	感莫	補	06-01
感不	伏惟	感憤	感感	補	08-11	感感	感莫	感莫	感莫	補	06-07

図2 李 義山文索引の出力例。右3列は、『樊南文集』正編、補編の巻数と葉数を示す。

いる。日本語処理システムの場合、それは2バイトコード体系によるのだから、普通は $2^{16-2}$ つまり約16,000字種程度の漢字を扱うのにすぎない。漢字は『康熙字典』だけで、繁体字が約50,000字種あり、それに簡体字や“kanji”を加えるとなると、2バイトコードではとても間尺に合わない。そこで色々な工夫が凝らされるのであって、台北やスタンフォード大学では、3バイトコード体系も検討されている。けれども私達は、こうしたコード体系の問題を固定的に考えず、さし

あたり、画像処理と文字合成の方法を援用して、漢字をはじめとする多種類の文字を処理しようとしているのである。例えば、14,000字種にのぼるハングルの場合も、母音と子音との組合せが12の型内に収まることに着目すれば、ターミナルで簡単に合成できるのである。だから、多種の言語を全て処理するには、種々の大きさの文字が作成できるマイコンが有効だと考えて、ターミナルの設計をいま計画しているところである。

(人文科学研究所)

## 保健コーナー

### スチューデント・アパシー

アパシーという語が新聞や雑誌を通して次第にひろがっている。精神医学では別にこと新しい語ではない。古くは、この言葉の形容詞(特にドイツ語の *apathisch*) が、ある種の精神病の行動記載によく用いられた。しかし、最近のこの名詞の語法は、精神病から離れて神経症圏に移っているばかりでなく、さらに漠然とひろがって、世人とくに20歳台の人の気風を示す一般語にさえなりつつある。ここでは用法を限定して、Walters, J. P., Jr. の定義に従うことにしよう。



Walters はアメリカ Harvard 大学の大学精神科医である。大学精神科医 College Psychiatrist という言葉も耳新しいが、私たちの身边では保健管理センターや保健診療所に勤務して、大学生の精神疾患や心理障害の予防と治療に当たっている精神科医がこれに相応する。この Walters の、1961年の論文の記載を中心に述べれば、スチューデント・アパシーとは、次のような一群の大学生をいう。即ち、学業に対する無気力・無関心を示す学生たちなのだが、これは怠学でもなく、在来精神病にも神経症にもあてはまらず、しかも現実的な原因によるものとも考えられない。この学業への無気力・無関心ないし学校へ出てこれられない状態は、放置すればずっと長く持続する。

学生自身は肉体のけだるさと、知的な無能力感に結びついた空虚な状態、あるいは無感動の状態としてこれを訴えるが、自分から精神科医やカウ

ンセラーを訪れることは稀である。在来からいわれている種々の「神経症」と異なり、不安、焦躁、苦悶を訴えることは少ないし、うつ病のように早朝覚醒を主とする不眠や、思考、感情のどこおる抑止もみられない。どちらかといえば、うつ病者のように外界から愛情をつかみとろうとするのではなく、外界が彼等の求めるものを有しないとして、いわば競争の舞台を降りてしまっている学生たちである。Walters はモデルとして、ゴンチャロフの小説に出てくるオブローモフ青年をあげている(『オブローモフ』3巻、米川正夫訳、岩波文庫)。



わが国でも、急激に留学生の増えはじめた昭和40年前後から、この種の大学生に着目して、名古屋大学の丸井文男氏は「大学生のノイローゼ—意欲減退症候群」の記載を行っている。いずれにせよこれらの学生は、自分で私たちのところを訪ねてくることはないの、家人、友人、教師に引張られてやってくる。会ってみると、うつ病者のように抑止もなく、自分のこともよく話してくれる好青年子女である。高校時代からすでにきわめて鋭敏な心を持っていて、対人的にも、諸環境条件に対しても種々敏感な感覚を働かせている人が多い。几張面、真面目で、中学や高校の成績は殆んどぬきんでているが、高校時代に既に不登校のきざしている人もいる。学校へ行かなくてはならないと心の中では思いつつも、行けないという点では小・中学校の登校拒否と似ているが、すでに年齢が中期ないし後期青春期にまで進んでいることもあって、まわりと自分とのズレをさらに鋭く感じとっている。それが社会に対する内なる反抗



を育てている場合もある。

しかし、少なくとも第一線級の活動家にはならないようである。ある場合にはそれが日記ないし手記にとどまり、ある場合には相談事で他人の役に立つために勉強会を組織し、またある場合には恵まれない子供たちのための集会に参加し、或いは自分でこの種の塾を開いて大いに成功する場合もある。このような成功は、副業には活動的になれるアパシー者の場合である。裏をかえせば、アパシー者の無気力・無関心は本業に限られる。本業を「普通に」やってゆくことが意外と難しいことになってしまっている。この意味でアパシー者は大学生とは限らない。すでに会社アパシーもいくつか報告されている。



私たちは、用語を厳密にとって、1) 不安・苦悶・焦躁など在来の神経症やうつ病にみられる症状が前景に出ていない、2) その他の精神、身体疾患でない、特に精神分裂病ではない、3) 長期にわたる本業からの離脱、4) 本業に参加したいができない、つまり怠業でない、という意味に限定してアパシーを考えたい。結局のところ、大学生であるにせよ、社会人であるにせよ、Walters

と同じくアパシーを新しい神経症の一種として考えてゆきたいのである。神経症という限り、フロイド流に言えばそこに無意識の機制が働く。Waltersは(本業を)しないことによって自分を自らの攻撃性から守り、それがまわりには受身の攻撃性として示される、という無意識の機制を記載している。



理論的な問題はさておき、事実としてこの種の神経症が増えつつあるのは何によるのであろうか。生活水準の上昇、高学歴社会、傑出人の生まれにくい社会など、間接的には種々の社会状況が問題にされる。もとより一義的に原因を規定することは不可能であろう。個人的にこの人たちに対処するには、本業からの離脱を心理社会的モラトリウム(猶予期間)とみなしてゆくことの重要性が指摘されている。私たちの経験によれば、アパシーの人たちが心やさしい人々であることは確かである。このような人々が、本業のうちで強さとやさしさの両面を養いながら生きてゆく機会は、だんだんと少なくなっているのではなかろうか、と考えさせられている日々である。

(保健管理センター 三好暁光)

## 計 報

大橋 隆憲(本学名誉教授・経済学博士)

3月11日逝去、71歳。本学経済学部卒。昭和40年本学経済学部教授就任、同50年退官。その間経済学部長(昭和41年～42年)、評議員(昭和42年～44年)を歴任。専門は統計学。

松本 清一(ウイルス研究所教授・医学博士)

3月13日逝去、59歳。本学医学部卒。昭和37年本学ウイルス研究所教授就任、同55年からウイルス研究所長を併任。専門はウイルス学、病理学。